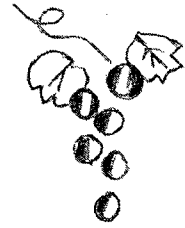


# 卒業論文要旨

昭和37年度卒業生



## 熊谷の地形と土地利用

— 農業用水からみた地域性 —

加 藤 史 子

熊谷周辺の地域は、荒川によって堆積された台地と低地で構成されている。この低平な地形を微地形的な視点から分類し、かつその上で展開されている人間生活の考察するということが今回の調査目的であった。

地形は大きく分けて、洪積台地（隆起した荒川扇状地）と沖積地に分けられる。

台地には沖積地との比高が15～20mのローム台地と沖積地面との比高は殆んどみられないポスト・ローム台地がある。ローム台地はロームの特徴や開析度などの考察から、武蔵野面に対比されると考えられるものとそれによりやゝ新しいと考えられる台地に分けられる。

沖積地は荒川の新しい堆積面で、ローム台地を切って堆積しており、扇形のなかりを示している。構成物質や比高などから、さらに礫堆、砂堆、低地、旧河道に細分できる。扇形の頂点近くには礫の分布が著るしいが、構成物質（地表の）の多くは、*Silt ~ Silty clay*の微細な物質である。この沖積地は、等高線が扇形を示し、一部に礫の分布もみられ湧水の分布がみられるため扇状地と区別されていることもあるが、現河床の状態が扇状地性の流路をとっていないこと、礫や湧水の分布が現在の地形との関連が薄いことなどから扇状地とは考えられない。これらの性質は、伏在地形の及ぼしたものと考えられる。

沖積地上の地形の繊妙な違いは、現在でも農業土地利用に反映している。

土地利用は低地であるために農地が大きな部分を占めている。現在の土地利用の動きの中で注目すべきことは、首都圏整備に伴う工場誘致である。この動きは、熊谷が戦前軍兵重工業地として発達したことが大きな要因になっていると考えられる。

一方農用地の利用をみると熊谷市全体で水田が6割もあるところから、ま

た現在の営農状況からみても水田はかなり重要な位置を占めていることがわかる。条里の遺構が残っている点からみても古くからの米の産地であったことがいえる。

### 農業用水からみた地域性

農業用水は水田地帯においては最も重要な生産手段であり、昔から数多くの紛争がその使用の利害関係を反映して起っていた。一般に排他的で地域的対立が大きく、非合理的な慣習が通用するといわれている農業用水の特性が、古くからの水田地帯である熊谷地域の農業の中でどのように表れたかを合口問題を中心に調査した。しかし合口問題に関しては熊谷の大里用水に含まれている六堰間で、地域的対立という用水の一般的性格の現れをみることはできなかった。つまり、この地域は農業用水の性質としては日本の他の地域の場合と比べて、かなり特殊なものであるということができる。

地域的対立が少なかったということは、荒川の性質によって昔から水量の変化が大きく洪水や旱ばつがしばしば起った。このことは荒川から取水している六堰の特定の地域に常に利益または損害を与えるというものでなくこうした自然災害に際しては、全ての堰が共通の悩みをもっており、地域的な不平等が顕著でなかったこと、歴史的にみて、江戸時代における支配関係者の相違により、最下流の堰がかなり有利に水を得られる条件にあったことなど昔から地域的対立を激化させることが少なく現在に至った。これが合口問題の成立した大正末～昭和初期の時代に、河川水利の調整が奨励され、国の補助制度が法制化されるほどの水利行政の要求に支えられるなど諸々の条件が有利に作用し合い、水田の維持管理に多大の関心を払う重要な水田地帯の性格が、用水問題の解決を促進したと考えられる。

## 都市化地域の地域性

— 鴻巣市と北本町を例にとって —

宮崎 由利子

はじめに

調査地域の設定にあたっては、どの地域でも地理学的対象となることから、自分の都市化に対する興味とフィールドへの距離を考慮し、さらに地形的に多少とも変化をもった地域として鴻巣市と北本町を選んだ。そしてこの都市化地域の地域性を出来る限り究明することを調査目標とした。

調査地域は、ほぼ埼玉県北東部に位置し東京を中心とする50 kmの圏